

第6巻「意味論」演習問題の解答と補足事項

2012. 12. 10

各章の解答は、各章の執筆者によるものを、編者がまとめたものである。また、各章に付された「補足」は、各章解答を踏まえて、編者が補ったものである。（中野弘三）

●第1章

○演習問題の解答

1. 本章の 1. 1. 4 項で述べられていることを参考にして、次の(1)と(2)の文において不定名詞句 a doctor の用法が特定の非特定のかわによって、その名詞句を受ける代名詞は人称代名詞 him か one のどちらかが選ばなければならない理由を説明しなさい。

(1) Mary wants to marry a doctor and Betty wants to marry him / *one, too.

特定の用法

one は不可

(2) Mary wants to marry a doctor and Betty wants to marry one / *him, too.

非特定の用法

him は不可

代名詞が照応する（受ける）先行の名詞句を「先行詞」というが、英語では先行詞の指示対象が特定のものである場合には人称代名詞(he, she, it, they など)を用い、それが不特定のものである場合には不定代名詞 one を用いる。(1)では代名詞の先行詞 a doctor が特定の用法で、指示対象が特定の医者(a certain doctor)であるため、人称代名詞 him で照応する必要があり、他方、(2)では先行詞が不特定の用法であり、指示対象が不特定の医者(whoever is a doctor)であるため不定代名詞 one で照応しなければならない。

2. 「手先の器用な日本人」という表現は〈日本人全体が他の国民と比べて手先が器用である〉という意味と〈日本人の中の手先の器用な人たち〉という意味の二通りの解釈ができる。このように二通りの解釈ができる理由を〈日本人〉という概念の捉え方に基づいて説明しなさい。

ヒント：〈日本人〉は国籍を視点として捉えた〈人〉の種(下位)概念であると同時に、様々な種類の日本人を包括する類(上位)概念でもある。

「日本人」という表現は、国籍を視点として分類した〈日本人〉〈アメリカ人〉〈フランス人〉〈中国人〉などの種(下位)概念の一つである〈日本人〉という概念を表す一方で、

いろいろな種類の日本人を包括する類(上位)概念としての〈日本人〉をも表す。そのため、「手先の器用な日本人」の「手先の器用な」(dexterous)という形容表現は国民の種類(〈人〉の種概念)としての〈日本人〉を修飾すると解釈される場合と、いろいろな種類の日本人を総称した類概念としての〈日本人〉を修飾すると解釈される場合がある。前者の場合に〈日本人全体が他の国民と比べて手先が器用である〉の解釈となり、後者の場合に〈日本人の中の手先の器用な人たち〉の解釈となる。

「手先の器用な日本人」に当たる英語表現 the dexterous Japanese も日本語の表現とまったく同様に二通りの解釈ができる。英語表現の二通りの解釈は次のように制限的用法と非制限的用法の関係節を用いてパラフレーズできる。

$$\text{the dexterous Japanese} = \left\{ \begin{array}{l} \text{① the Japanese, who are dexterous} \quad (\text{非制限的用法}) \\ \quad [(\text{他の国民と比べて}) \text{手先が器用な国民である日本人}] \\ \text{② the Japanese who are dexterous} \quad (\text{制限的用法}) \\ \quad [\text{日本人の中で手先が器用である人たち}] \end{array} \right.$$

このようにパラフレーズできるところから、the dexterous Japanese における名詞修飾の形容詞にも制限的用法と非制限的用法があると見なすことができる。日本語の「手先の器用な日本人」においても、連体修飾の形容表現「手先の器用な」に制限的用法と非制限的用法があると考えれば、英語の名詞修飾の形容詞と同様、二通りの解釈があることは当然のこととして説明できる。

3. 英語の料理用語の boil¹(1. 2. 3 項の図 4 参照)に相当する日本語「煮る¹」(=熱した水で料理する)には「煮る²」「茹でる」「炊く」の三つの下位語が存在する。これらの下位語の意味の違い(種差)は何であるか答えなさい。また、その違い(種差)と英語の boil¹の下位語 boil²と simmer の間に見られる違い(種差)との相違を述べなさい。

「煮る ¹ 」(熱した水で料理する)の下位語	下位語の意味と種差 (下線部)
煮る ²	食材を熱した水(湯)で加熱して柔らかくして、 <u>味を付ける</u> 。
茹でる	食材を熱した水(湯)で加熱して <u>柔らかくすることのみを目的とし、味付けは行わない</u> 。
炊く	調理法は「煮る ² 」と同じであるが、 <u>調理の対象となる食材が米などの穀物である場合をいう</u> 。ただし、西日本の方言では「煮る ² 」の同義語としてもっぱら「炊く」が使われる。

「炊く」は「煮る²」と同義であるが、標準語では、調理の対象である食材の種類によって

使い分けられる。すなわち、食材が米などの穀物である場合には「炊く」が用いられ、それ以外の食材の場合は「煮る²」が用いられる。

(例) 米／小豆を炊く——魚／野菜を煮る (ただし、米以外の穀物の場合は「小豆を煮る」のように、「煮る」が用いられる場合もある)

一方、「茹でる」と「煮る²」は「食材を熱した水(湯)で加熱して柔らかくする」点では同じであるが、「煮る²」にはこれに「味を付ける」という作業が加わるのに対し、「茹でる」は「熱した水(湯)で加熱して柔らかくする」ことのみを目的とした作業である。

英語の boil¹ の下位語 boil² と simmer の違いは以下のようなものである。

boil ¹ (to cook something in very hot water)	下位語の意味と種差 (下線部)
boil ²	to cook food <u>in water that is boiling</u>
simmer	to cook <u>slowly at a temperature near boiling</u> , or to cook something in this way

[下位語の意味は *Macmillan English Dictionary for Advanced Learners 2007* (Macmillan Publishers Limited) より。下線は筆者]

boil² と simmer の違い(種差)は食材を加熱する水(湯)の温度にあり、boil² は沸騰点に達した温度の水で加熱するのに対し、simmer は沸騰点より少し低い温度の水でゆっくり加熱する調理法をいう。

日本語の「煮る¹」の下位語である「煮る²」と「茹でる」の種差は味を付けるか否かという調理法の違いであり、「煮る²」と「炊く」の(標準語での)種差は食材が穀物であるか否かという調理の対象の違いである。これに対し、英語の boil¹ の下位語 boil² と simmer の種差は、味付けや調理の対象に関わるものではなく、加熱に使う水の温度と加熱の速度に関わるものである。

○演習問題1 解答の補足：名詞句の指示と照応について

名詞句の指示機能の強弱の相違は照応表現(代名詞、照応名詞句など)の選択に反映される。

強い指示機能を持つ指示指向用法に属する指示的(用法の)定名詞句および特定の(用法の)不定名詞句の照応には、指示対象の有生と無生の別、および性別を形式で区別する人称代名詞(he / she / it)、ないしは照応名詞句(=the+名詞)を用いるのに対し、指示機能が弱い(あるいは無い)叙述指向用法に属する属性的(用法の)定名詞句や不特定の(用法の)不定名詞句には人称代名詞や照応名詞句による照応ができない。以下の例文では先行詞の

名詞句には下線を、その照応形には二重下線を施す。

- (1) a. I met a/the doctor at the party. I had a pleasant conversation with him / the doctor.

[a doctor＝特定の不定名詞句, the doctor＝指示的定名詞句]

- b. Who is your favorite teacher?——*He is Mr. Brown.

[your favorite teacher＝属性的定名詞句]

- c. He wants to be a doctor. *He / The doctor is a specialist in brain surgery.

[a doctor＝不特定の不定名詞句]

これに対し、特性・属性の伝達を主たる機能とする一方で、指示対象の存在の含意を持つ属性的定名詞句には、指示対象の有生・無生の区別や性別とは関係なしに it で受ける場合と、指示指向用法の名詞句同様、人称代名詞(he / she / it)で受ける場合とがある。属性的定名詞句は、上述のように“役割”を表すが、その“役割”を果たす指示対象を特定する(specify)文、すなわち指定文(specificational sentence)で照応表現が用いられる場合、その照応表現は(有生・無生の区別や性別とは関係なしに)常に it となる。

- (2) a. Who is the President of the U.S.?——It is Barak Obama.

- b. Don't forget, it's your job to support your leader, whoever it is.——LDCE

(2a)の It (=the President of the U.S.) is Barak Obama は定名詞句が表す“役割”を果たす指示対象を Barak Obama と特定する文であり、(2b)の whoever it is は〈your leader が誰と特定されるにせよ〉という意味の譲歩節である。他方、“役割”を果たす指示対象を特定するのではなく、その指示対象についての情報をさらに付け加える文中では照応に人称代名詞を用いる。

- (3) a. An official residence, 10 Downing Street, is assigned to the prime minister,

and he also has the use of Chequers, a country mansion in Buckinghamshire.

——*Encyclopaedia Britannica* 2002 (ダウニング街 10 番地 にある官邸が首相に与えられており、首相はまたバッキンガムシャー州にある地方官邸、チェカーズも使用できる) [ここでの the prime minister は特定の個人ではなく、イギリスの首相の職にある人を指す属性的定名詞句]

- b. In most European countries the mayor is elected by the local council from among its members; usually he is the leader of the majority party or of one of the largest parties.——*Encyclopaedia Britannica* 2002 (ヨーロッパのたいていの国では市長は地方議会によって議員の中から選ばれる。通例市長は多数党ない

しは最大の党の党首である)

(3)では、照応代名詞 he を含む第二文の内容は、それぞれ、(イギリスの)首相と市長について第一文の内容に追加する情報を与えるものである。(3)の第二文が、(2)の it を含む文(節)のように指示対象を特定するものでないことに注目されたい。

叙述指向用法の名詞句のもう一つ、不特定の不定名詞句に照応する表現は一般的には不定代名詞 one である。

(4) a. I want to buy a laptop computer. Do you have one?

b. They say she is a good pianist, but I don't think her one.

なお、本文 1.1.4 項で挙げた(22) Mary wants to marry a rich man.のように、特定の用法と不特定の用法の二通りの解釈が可能な文の場合には、不定名詞句が特定の用法の場合は人称代名詞(he/she/it)で、不特定の用法の場合は one で照応する。

(5) a. Mary wants to marry a rich man and Betty wants to marry him, too. [a rich man = a certain rich man ; 特定の用法]

b. Mary wants to marry a rich man and Betty wants to marry one, too. [a rich man = whoever is a rich man ; 不特定の用法]

不定名詞句の照応にも名詞句照応があるが、名詞句照応は特定の用法にのみ可能。

(6) a. I met a doctor at the party. The doctor happened to be a friend of my father's
[a doctor = 特定の用法]

b. John is a politician. *The politician is a member of the Democratic party.
[a politician = 不特定の用法]

c. We are looking for a doctor. *The doctor is an obstetrician.
[a doctor = 不特定の用法]

ただし、不特定の不定名詞句とその照応表現を含む文が同一の非現実世界の事態を述べる文脈では、指示指向的(指示的／特定の)名詞句と同様に、照応表現として人称代名詞や照応名詞句を用いることができる。

(7) You must write a letter to your parents. It has to be sent by airmail. The letter
must get there by tomorrow. (Karttunen 1976)

(7)の三つの文は、すべて、“聞き手が未来になすべき行為”という同一の非現実世界の事態を表しているので、下線部の名詞句の指示対象は三つとも同一物である、すなわち、**同一指示的(coreferential)**であると解釈できる。このように複数の名詞句の指示対象が同一指示的と解釈可能な文脈では、人称代名詞照応や名詞句照応が可能となる。

(8) a. You must write a letter to your parents and mail the letter right away. *They
are expecting the letter.

b. John wants to catch a fish and eat it for supper. *Do you see the fish over
there? (ibid.)

においては、第一文の二つの等位節は、それぞれ、聞き手の義務の世界、John の願望の世界という同一の非現実世界の事態を表すと解釈されるので、二つの下線部の名詞句は同一指示の解釈が可能であり、したがって人称代名詞照応や名詞句照応が可能である。ところが、第二文の They are expecting the letter.(両親はその手紙を待っています)や Do you see the fish over there?(向こうにいるその魚が見えますか)は、非現実世界ではなく、現実世界の事態を表すとしてしか解釈できない。不特定の不定名詞句の照応表現が非現実世界の事態と現実世界の事態にまたがって現れた場合、英語では、当の名詞句と照応表現が同一指示的であるとは解釈できないので、(8a,b)の第二文は意味上不適格な文となる。因みに、指示指向的な指示的定名詞句や特定の不定名詞句の場合は、現実世界と非現実世界にまたがって現れたとしても(不)定名詞句とその照応表現の間に同一指示の解釈が成り立ち、人称代名詞照応や名詞句照応が可能である。

(9) John is engaged to a movie actress. Bill wants to see her/the movie actress.
現実世界の事態 非現実世界の事態

●第2章

○演習問題の解答

1. 次の各対の語の間にはどのような意味関係が成り立つのかを考察しなさい。

a. bicycle saddle

部分・全体関係：

saddle 〈サドル〉は **bicycle** 〈自転車〉の一部である。

b. go come

反意関係の中の反対関係：

go と **come** は、人やものの移動を反対の視点（話し手や聞き手から離れるか・話し手や聞き手に近づくか）から述べた表現である。2.2.4 c 項で取り上げた反対の関係ということになる。（日本語の「行く」と「来る」も反対の関係であるが、**go** と **come** にいつも対応するわけではない。）

c. old young

反意関係の中の段階的關係：

old 〈年をとった〉と **young** 〈若い〉は、中間段階が存在し、**older**・**younger** 〈より年をとった・より若い〉などの表現が可能となる。2.2.4 b 項の段階的な関係ということになる。

d. table bed

同等下位語の関係：

共通の上位語として **furniture** が考えられる。〈これはテーブルである〉は〈これはベッドではない〉を含意し、また〈これはベッドである〉は〈これはテーブルではない〉を含意するため、非両立性の関係も成り立つ。

e. anger emotion

上下関係：

anger 〈怒り〉が下位語であり、**emotion** 〈感情〉が上位語となる。

2. 次の各(a)と(b)の文において、下線の語がそれぞれどのような意味で使われているのか

を考えなさい。また、両者にどのような意味のつながりがあるのかも考察しなさい。

- (1) a. Mary broke the bottle.
b. The baby finished the bottle.

(1a)は〈メアリーは瓶を割った〉という意味であり、(1b)は〈赤ん坊がミルクを飲み終えた〉という意味である。〈瓶〉と〈ミルク〉は、「容器」と「容器（哺乳瓶）の中身」に相当する。

- (2) a. The newspaper fired its editor.
b. John spilled coffee on the newspaper.

(2a)は〈新聞社が編集長を解雇した〉という意味であり、(2b)は〈ジョンは新聞紙の上にコーヒーをこぼした〉という意味である。〈新聞社〉と〈新聞紙〉は、「作り手」と「作り出されたもの」に相当する。

- (3) a. Mary ate a fig for lunch.
b. Mary watered the figs in the garden.

(3a)は〈メアリーはお昼にイチジクを食べた〉という意味であり、(3b)は〈メアリーは庭のイチジクの木に水をやった〉という意味である。〈イチジク〉と〈イチジクの木〉は、「(植物の) 実」と「植物」に相当する。

- (4) a. The company's merger with Honda will begin next fall.
b. The merger will produce cars.

(4a)は〈その会社とホンダとの合併は来秋始まるであろう〉という意味であり、(4b)は〈合併会社は車を生産するであろう〉という意味である。〈合併〉と〈合併会社〉は、「出来事」と「その出来事の結果、生まれたもの」に相当する。

- (5) a. John traveled to New York.
b. New York kicked the mayor out of office. (Pustejovsky 1995: 31)

(5a)は〈ジョンはニューヨークに旅行した〉という意味であり、(5b)は〈ニューヨーク市民は市長を辞職させた〉という意味である。〈ニューヨーク〉と〈ニューヨーク市民〉は、「場所」と「その場所に住む人々」に相当する。

3. 次は親族用語を成分分析した例である。例を参考に、〈祖母〉〈弟〉〈孫〉の意味成分を考えなさい。[池上(1975: 304, 305)も参考になる]

(例) 父 : [1 世代上] ∧ [直系] ∧ [男性]

姉 : [同世代] ∧ [傍系] ∧ [女性] ∧ [年上]

祖母 : [2 世代上] ∧ [直系] ∧ [女性]

弟 : [同世代] ∧ [傍系] ∧ [男性] ∧ [年下]

孫 : [2 世代下] ∧ [直系]

○演習問題2 解答の補足：メトニミー表現

(1)の bottle が表す a. 〈瓶〉と b. 〈ミルク〉, (2)newspaper が表す a. 〈新聞社〉と b. 〈新聞紙〉, (3)fig が表す a. 〈イチジク〉 b. 〈イチジクの木〉, (4)merger が表す a. 〈合併〉と b. 〈合併会社〉, (5)New York が表す a. 〈ニューヨーク (場所)〉 b. 〈ニューヨーク市民〉などの a と b 二つの意味の関係は、いずれも、メトニミー (換喩) の関係とも捉えることができる。メトニミーとは、ある事物や概念を表すのに、それと近接する (密接に関係する) 事物や概念を表す表現を用いる比喩的表現方法をいう。たとえば、赤ちゃんに哺乳瓶でミルクを与えている場面では瓶はミルクに近接する (密接に関係する) ものである。 (1b) におけるように (哺乳) 瓶いっぱいミルクを表すのに bottle が用いられると、この bottle はメトニミー表現である。また、(2)では newspaper (新聞紙) をそれを発行する〈新聞社〉を表す表現として、(3)では fig (イチジク) を〈イチジクの木〉を表す表現として、(4)では merger (合併) をそれによって生まれた〈合併会社〉を表す表現として、(5)では場所を表す New York をそこに住む市民を表す表現として、それぞれ、用いられている。〈新聞紙〉とそれを発行する〈新聞社〉の間、〈イチジク〉とそれを生み出す〈イチジクの木〉の間、〈合併〉とそれから生み出される〈合併会社〉の間、New York とそこに住む市民を表す New York の間には、それぞれ、下線で示した近接関係 (密接な関係) が存在し、後者の概念を表すのに前者の概念を表す表現を用いるとそれがメトニミー表現である (たとえば、〈新聞社〉を表す newspaper (新聞紙) は〈新聞社〉のメトニミー表現である)。

●第3章

○演習問題の解答

1. 意味構造における構造上の位置に基づいて、主題という意味役割を明示的に定義しなさい。

直感的な意味役割の定義[Gruber 1965, 1976 参照]によると、主題という主題役割は、「ある場所にある物、あるいはある経路を移動している物」と定義されることになるが、本書で提案された意味構造における構造上の配列型を用いて定義すると、主題は、GO 関数と BE 関数の第一項として明示的に定義される。なお、本書では、非常に限られた関数しか、説明の便宜上設けていないために、以上のように定義されることになるが、GO 関数と BE 関数に加えて、STAY 関数、ORIENT 関数、EXTEND 関数も設ける Jackendoff (1990) の体系においては、それらの関数の第一項も主題と定義されることになることにも注意して欲しい。

2. 使役文の意味を分析する際に、CAUSE という抽象的な関数を用いることの利点について具体的な例文に基づいて議論しなさい。

本文の 3.2.2 項の例文(30)と(31)を用いてこの議論を始めることにしよう。

(30) a. John forced/caused Mary to go away. (空間場)

b. John made Mary go away.

(31) a. John painted the wall green. (属性場)

b. John froze the ice cake solid.

c. John hammered the metal flat.

(30)のそれぞれの文から、(32)の文が成り立つということを推論(inference)することができる。

(32) Mary went away.

同様に、(31)のそれぞれの文からは、(33)のそれぞれの文を推論できる。

(33) a. The wall was green. (属性場)

b. The ice cake was solid.

c. The metal was flat.

(30)と(31)とに含まれる異なった動詞, forced, caused, made, painted, froze, hammered から CAUSE という共通の意味を抽出することで、今用いられた二つの推論を(34)として簡潔に述べることができる。

- (34) a. CAUSE (X, GO (Y, AWAY)) → GO (Y, AWAY)
b. CAUSE (X, GO (Y, TO (PROPERTY))) → IS (Y, PROPERTY)

しかし, CAUSE を抽出しておかないと, 異なった6個の動詞についていちいち推論を(35)のような形で述べないといけない。

- (35) a. John forced Mary to go away. → Mary went away.
b. John caused Mary to go away. → Mary went away.
c. John made Mary go away. → Mary went away.
d. John painted the wall green. → The wall was green.
e. John froze the ice cake solid. → The ice cake was solid.
f. John hammered the metal flat. → The metal was flat.

使役動詞が英語には, この6個以外にも多くあることを考えると(35)のような推論を動詞ごとに述べていることは非常に不経済であるし, 有意義な一般化を見失うことになる。CAUSE を抽出しておけば, (34)の形で推論を簡潔に述べることができる。よって, 使役文の意味を分析する際に, CAUSE という抽象的な関数を用いることには利点がある。

更に, 使役動詞 kill であれば, おおよそ CAUSE (X, NOT (BE (Y, ALIVE))) と分解できる。加えて, CAUSE (X, NOT (BE (Y, ALIVE))) → NOT (BE (Y, ALIVE)) の推論も述べることも可能になる。このように, CAUSE という抽象的な関数を用いることには利点がある。

3. 行為者と被行為者を設ける理由について具体的な例文に基づいて述べなさい。

被行為者を設ける理由から始めることにする。まず, 本文の 3.3.2 項の(51)の動詞 hit の目的語に注目してみよう。

- (51) a. Sue hit Fred.
b. The car hit the tree.
c. Pete hit the ball into the field. (Jackendoff (1990: 125))

(51a)の Fred, (51b)の the tree, (51c)の the ball のいずれも, (52)に示した統語枠の NP で示された位置に生起することができるという共通の性質を持っている。よって, (53)の文はいずれも文法的な文である。

- (52) $\left[\begin{array}{l} \text{What happened} \\ \text{What Y did} \end{array} \right]$ to NP was ... (Jackendoff (1990: 125))

- (53) a. What happened to Fred was Sue hit him.
b. What happened to the tree was the car hit it.

- c. What happened to the ball was Pete hit it into the field.

(Jackendoff (1990: 126))

(51a)の Fred, (51b)の the tree, (51c)の the ball は、どれも hit という行為の影響を被るものという共通の意味役割を持つ。この意味役割を被行為者(patient)と呼ぶことにする。注意すべきは、(51a)の Fred は、Sue (あるいは Sue の手) があたる着点でもあり、(51b)の the tree も the car があたる着点でもあり、(51c)の the ball は移動するものなので主題でもある。つまり、(51a)の Fred, (51b)の the tree, (51c)の the ball に被行為者という意味役割が与えられても、それにより、動作主の行為を受けることから生じる移動に関わる意味役割が失われるわけではない。よって、被行為者という意味役割は、従来の一連の意味役割とは種類を異にするものとして新たに設ける必要がある。

行為者という意味役割についても同じような議論が成り立つ。(54)の主語に注目してみる。

- (54) a. The sodium emitted electrons.

- b. Bill ran down the hill.

- c. The sponge absorbed the water.

(Jackendoff (1990: 126))

(54a)の the sodium, (54b)の Bill, (54c)の the sponge は、どれもその文の動詞で示された行為を行う者という共通の意味役割を持っている。しかも、これらの要素は、(55)に示した統語枠の NP の位置に生起できる。よって、(56)の文はいずれも文法的となる。

- (55) What NP did was ...

(Jackendoff (1990: 126))

- (56) a. What the sodium did was emit electrons.

- b. What Bill did was run down the hill.

- c. What the sponge did was absorb the water.

(Jackendoff (1990: 126))

このような意味役割を行為者(actor)と呼ぶことにする。(54a)の the sodium, (54b)の Bill, (54c)の the sponge のいずれも行為者という意味役割を持っているが、それにより、それぞれが持つ従来の意味役割である起点、主題、着点が失われるわけではない。前に議論した被行為者が、主題、着点、起点といった従来の一連の意味役割とは独立した、別種の意味役割であったように、被行為者と対をなす行為者もまた、従来の一連の意味役割とは独立した、別種の意味役割として新たに設ける必要がある。

○演習問題1 解答の補足：場所理論 (localist theory)

主題という意味役割が「ある場所にある物、あるいはある経路を移動している物」と定

義され、本書で示された分析では GO 関数と BE 関数の第一項として定義されるのは、場所理論の考え方に由来する。場所理論では移動(motion) と位置(location) という空間的な概念に基づいて他の様々な非空間的な意味領域の事態が理解できると考えられる。本書第3章 3.1.2 項でも掲げている

(1) John went to Tokyo.

(2) The egg is in the box.

における went や is は、それぞれ、空間的移動やある空間的位置での存在を表し、これらが空間的な「移動」と「位置」という場所理論の基本的概念である。場所理論によれば、これらの空間的移動や位置の概念は比喩的に拡張され、他の様々な非空間的な意味領域に適用される。それが 3.1.5 項で意味場(semantic field)として述べられている事柄である。空間的位置での存在を表す be 動詞は

(3) a. The egg is nourishing. (属性場)

b. The egg is mine. (所有場)

c. The meeting is now in progress. (時間場)

におけるように、主語の指示対象が非空間的な場（意味領域）において何らかの「位置」を占める（すなわち、何らかの特性を持つ）ことを表すことができる。また、空間的移動を表す go も同様に非空間的な場での「移動」（または「変化」）を表すことができる。

(4) a. The company went bankrupt. (属性場)

b. First prize went to him. (所有場)

c. The time went fast. (時間場)

(1)～(4)に見る、空間的概念だけでなく、非空間的概念をも表す be や go に対して BE 関数や GO 関数を想定する考え方は本章で紹介したジャッケンドフの概念意味論(conceptual semantics)に由来する。その概念意味論の分析の背景には場所理論があり、したがって、BE 関数、GO 関数は場所理論的性質を持つものである。

このように、場所理論では「移動」と「位置」という概念がすべての種類の事態の意味分析の基本にあると見なされるが、この「移動」と「位置」という基本的事態の主題（トピック）の意味役割が「主題」(theme)であり、事態を表す文の主語がこの意味役割を担う。「主題」が GO 関数・BE 関数の第一項と定義できるのはそれゆえである。

●第4章

○演習問題の解答

1. 法助動詞の意味と用法の複雑さは何に起因するのだろうか. 考えられる理由を挙げなさい.

次のような理由を挙げることができる.

- 1) 一つの法助動詞がいくつかの法性を表す. これは他の法表現には見られない法助動詞特有の性質である.
- 2) 法助動詞の表す法性は文脈に大いに依存し, 且つ, 意味を明確に区別することが困難な場合が存在する. **can** が表す「能力」と「可能性」の区別の難しさなどはその一つの例である.
- 3) 法助動詞の過去形は, 多くの場合, 現在時を表す. 形態と表す時間が一致しないことが法助動詞の用法を一層複雑にしている.
- 4) 法助動詞の表す意味には, 本来の意味の他に場面との相互作用によって生じる意味がある. この語用論的な意味の存在が法助動詞の意味の複雑さの一因である.

2. あなたはお父さんの病気について医者から次の二通りの言い方をされたとする. どちらの言い方が深刻だと受け止めるか. その理由は何か.

- a. Your father's illness can be fatal.
- b. Your father's illness may be fatal.

can は「理論的可能性」を表し, **may** は「現実的可能性」を表すとされる. これによれば, (a)はお父さんの病気が命取りになる可能性が理論上存在することを意味するが, 実際にその通りになるかどうかは分からない. 一方, (b) は命取りになる可能性が現実存在することを意味する. したがって, この表現の方が深刻な響きを持つ.

3. 次例のように, 仮定法過去では過去時制が用いられる. この理由を考えてみよう.

- a. If you *lived* closer, you'd be able to come to see me more often.
- b. I wish I *had* more free time.

過去時制は単に時間的な隔たりだけでなく心理的な隔たりをも表す. 仮定法過去は現在の事実とは異なることを仮定したり願望したりする用法であるが, そうした現実からの隔たりを言語的に表示するために過去形が用いられるものと考えられる.

○演習問題2 解答の補足：can と may の違い

can は「理論的可能性」を表し，may は「現実的可能性」を表すとされるが，この違いは can と may を含む文の発話の意味に関係する。

文の発話の意味は，従来から‘モダリティ(modality) [命題(proposition)]’と二層に分析されるが，最近では，モダリティの部分はさらに二つの部分に分解されて，次のような階層構造を成すと考えられるようになっている。

(1) 対人モダリティ [対事モダリティ [命題]]

命題とは文が表す事態の内容で，これには事態が発生（存在）する時も含まれる．対事モダリティとは文が表す事態(=命題)に対する話し手の心的態度で，「命題態度」(propositional attitude)とも呼ばれる．これには話し手の命題の事実性についての判断，評価，命題実現の願望や意志などが含まれる．対人モダリティとは聞き手との相互作用(interaction)や聞き手への配慮などに関わる意味で，発話行為の発話の力や丁寧さを表す表現の意味などがこれに属する．文の発話の意味分析で重要なことは，「命題」の内容は平叙文では“主張され”，疑問文では“(事実かどうか) 問われ”，否定文では“否定される”のに対し，「対人／対事モダリティ」の内容は話し手の主観的な心的態度を表すもので，“主張され”たり，“問われ”たり，“否定され”たりすることがないということである。

canが表す「理論的可能性」とmayが表す「現実的可能性」を比較すると，前者の「可能性」が(1)の(文の発話の)階層構造の命題の一部を成すものであるのに対し，後者の「可能性」は「命題が事実である可能性がある」という話し手の（主観的な）判断，すなわち，対事モダリティを表すものであると考えられる．この違いは，canとmayを含む疑問文や否定文を見ると直ちに明らかとなる．「理論的可能性」を表すcanは疑問文で用いることができ，またその意味を否定することができる。

(2) a. Can your father's illness be fatal?

b. Your father's illness can't be fatal. [「可能性がない（はずがない）」とcanが表す可能性が否定されている]

これに対し，「現実的可能性」を表すmayは疑問文で用いることができず，またその意味が否定されることはない。

(3) a. *May your father's illness be fatal?

b. Your father's illness may not be fatal. (あなたのお父さんの病気は命にかかわるものでないかもしれない) [否定されているのはmayの意味ではなく，命題の内容で

あることに注意]

命題の内容は、客観的な事態として話し手が主張（または否定）するものであり、またそれが表す事態が存在するか否かを聞き手に問うことができるものである。一方、対事モダリティは命題（客観的な事態）に対する話し手の主観的な判断を表すものであるので、その判断自体は主張・否定・疑問の対象にはなり得ない。canが表す「理論的可能性」とmayが表す「現実的可能性」は、それぞれ、法形容詞表現‘it is possible (that)’と法副詞‘possibly’にパラフレーズできる。canのパラフレーズit is possible (that)は、次の(4)のように、疑問・否定の対象になり得るのに対し、(5)に示したmayのパラフレーズpossiblyは疑問・否定の対象にはなり得ないことにも注目されたい[本文4.2.3項、4.2.4項も参照]。

- (4) a. Is it possible that your father's illness is fatal?
b. It is not possible (or impossible) that your father's is fatal.
- (5) a. *Possibly, is your father's illness fatal?
b. *Not possibly (or *Impossibly) your father's illness is fatal.

問題文(a)のcan (= it is possible (that)) が表す「理論的可能性」は「可能性」が命題の一部として主張されるところから生まれて来るものであり、他方、(b)のmay (= possibly) が表す「現実的可能性」は、現実の何らかの証拠に基づいて命題が事実である可能性があると推測する話し手の主観的判断(=対事モダリティ)を表す。

なお、「現実的可能性」を表すmayが対事モダリティ表現であるのに対し、法助動詞が対人モダリティを表す場合もある。発話行為の発話の力や丁寧さを表す法助動詞の用法がこれに当たる。以下に例を示す。

- (6) a. You can/may go home. (家に帰ってよろしい) <許可>
b. You must come home by ten p.m. (午後十時までに帰宅しなければならない) <要請／命令>
c. You should go to the dentist. (歯医者に行きなさい) <提案>
- (7) a. May I help you? (何にいたしましょうか) [客に対する店員の丁寧なく申し出>]
b. Could you help me? (手伝っていただけませんか) [丁寧なく依頼>]
c. You might try calling the store. (店に電話をかけてみてはどうでしょうか) [丁寧なく提案>]

(6)の法助動詞はいずれも< >内に示した発話の力を持つ発話行為を遂行するものであり、(7)の法助動詞もいずれも丁寧に発話行為を遂行する機能を果たすものである。

●第5章

○演習問題の解答

1. 意味変化が生ずる要因を二つ挙げ、それぞれ例を挙げて論じなさい。

意味変化は主に用法拡張と社会の変化によって起こる。用法拡張には、意図的な拡張と、聞き手の再解釈による意図されないものがある。前者の例としては、物理的移動を表すpass(通過する)を時間の概念領域に適用してTime passes(時は過ぎる)のような表現を創出するケースがあり、この用法拡張によりpassに新たな意味が生じ、多義化が起こる。また、「ふつうにおいしい」「あの人やばい」「微妙に暑い」といった表現の意味がしだいに本来の意味からずれていくのも、これらの表現の意図的な拡張の結果である。意図されない用法拡張の例としては、例えば、OE. bridd「ひな鳥」がbird「(一般の)鳥」へと一般化されたケースがわかりやすい。この発達では、「ひな鳥」が一度の拡張によって直接「(一般の)鳥」へと拡張されたのではなく、「ひな鳥」から段階的に指示物の範囲を広げながら、しだいに「(一般の)鳥」を指すようになったのである。この場合、ディスコース(発話の場)における使用における用法の微妙なずれが蓄積した結果、一般化が起こったのである。以上のケースでは、意味変化はディスコースにおける話し手と聞き手のやりとりから生じるが、社会の変化から生じる意味変化では、変化は社会構造および物質文化の変化によってもたらされる。paper(紙)がもともと〈パピルス〉を表す語に由来するように、テクノロジーの発達によるもの、そしてspirit(精神)の意味が〈息吹〉の意味から生じたように、世界観の変化によるものなどが最も一般的なケースである。

2. 主観化と相互主観化の違いについて、日英語の例を用いて論じなさい。

主観化とは、もともと客観的な意味を表していた表現が、しだいに話者の主観的な展望や判断を表すようになることをいう。主観化の例として、もともと〈力が強い〉という客観的な特性を表したmayが、〈～できる〉という能力の意味や〈～してよい〉という許可の意味をへて、〈～かもしれない〉という推量の意味を発達させたケースがある。その他にも、be going toの未来の意味、I thinkの認識の意味、そしてwhileの譲歩の意味などは、いずれも主観化によって生じた意味である。これに対して、相互主観性とは、聞き手に対する配慮に関連した意味特性を指し、相互主観化とは、そのような意味を生じさせる意味変化のことをいう。英語のpleaseや丁寧さの過去などポライトネスに関わる表現の意味が相互主観性の例としてあげられる。これらの表現は、すべて主観化をへて相互主観的な意味を獲得したものである。しかしなんといっても日本語などに見られる丁寧語「です」「ます」など

の発達は、もっとも典型的な相互主観化の例である。

3. メタファーによると思われる、日英語の意味変化の例を挙げなさい。

メタファーによる意味変化の例はじつさい数え切れないほどあるが、日英語に共通するものとして、例えば、視覚の表現によって理解を表すメタファーに基づくものがある。英語のseeには、〈～が見える〉という意味に加えて、〈～がわかる〉という意味があるが、後者の意味は、前者の意味に基づくメタファー拡張の例である。同様に、日本語でも、「話の筋が見えない」というように、「見える」を〈理解する〉という意味で用いるが、これはseeの発達と並行の意味変化によるものである。

○演習問題2 解答の補足：主観化・相互主観化と文の発話の意味

主観化と相互主観化という意味変化は第4章の演習問題解答の補足「canとmayの違い」で述べた文の発話の階層構造、すなわち、

(1) 対人モダリティ [対事モダリティ [命題]]

と密接な関係がある。その補足では、「現実的可能性」を表す認識的用法のmayは話し手の主観的な心的態度を表す対事モダリティ表現であると述べた。しかし、mayのこの用法はmayが最初から持っていたものではなく、後で獲得した用法である。mayは古くは現代英語のcanと同じように用いられ、主語の「能力」や「一般的(客観的)可能性」を表していた。現代英語においても、限られた文脈の中ではあるが、このような用法の名残が見られる。

(2) a. Deal with the problem as best you may. (能力)

b. He may be intelligent, but he has no common sense. [= It is possible that he is intelligent, but....] (一般的可能性)

このような用法が表す意味は、明らかに、現代英語のcanの意味と同様、命題の一部を成す意味である。主語の「能力」や「一般的可能性」を表していたmayが「現実的可能性」を表すに至った意味変化は、「命題」表現から主観的な「対事モダリティ」表現への変化、すなわち、「主観化」の例といえる。第4章演習問題解答の補足でも述べたように、mayはさらにYou may go home.のようなく許可>を表す遂行的用法や、May I help you?のような丁寧表現を発達させ、「対人モダリティ」表現としての用法を獲得している。この用法の獲得は、mayの意味(用法)に「相互主観化」が生じたことを示していると思なうことができる。

このような“命題表現→対事モダリティ表現→対人モダリティ表現”という意味変化(意味拡大)は *may* 以外にも多くの表現で観察される。たとえば、法副詞の多くは、元来命題表現である様態副詞(*manner adverb*)であったが、近代英語期になって対事モダリティ表現である法副詞としての用法を発達させ、さらに現代英語では対人モダリティ表現としての用法を持つに至っている。若干の例を挙げると、*perhaps* は元来 ‘*per* (= *by*) + *haps*, plural of *hap* (= *chance*)’ という内容の副詞句で、*perchance* (= *by chance*)と同様に〈たまたま、偶然に〉の意の様態の副詞であった。

- (3) Leave now, lest perchance he find you. (彼が偶然あなたを見つけてはいけ
ないで、今すぐに立ち去りなさい) (*Longman Dictionary of Contemporary English*
5th Edition より。以下では LDOCE)

このような命題表現の *perhaps* が初期近代英語期になると、たとえばシェイクスピアの作品においては、次のように〈多分〜だろう〉の意の推量表現、即ち、対事モダリティ表現として用いられるようになる。

- (4) a. 1604 *Hamlet* I . iii. 14 Perhaps he loves you now, And now no soil nor cautel
doth besmirch The virtue of his will
b. 1604 *Othello* III. iii. 452 Patience, I say; your mind perhaps may change.

さらに現代英語では、

- (5) a. Perhaps we could all go out for dinner sometime? (LDOCE)
b. You don't look well — perhaps you should go to the doctor. (ibid.)
c. Perhaps you can explain what went wrong? (ibid.)

におけるように、〈～してはどうでしょうか〉〈～してもらえませんか〉の意を表し、〈提案〉や〈依頼〉などの発話行為の発話の力を和らげる丁寧表現、すなわち対人モダリティ表現としての機能を獲得している。

同様に、*surely* も元は次の OED (オックスフォード英語大辞典) からの用例に見るように *safely* (安全に)の意の様態の副詞(命題表現)として用いられた。

- (6) c1400 *Mandeville* (Roxb.) ix.34 He myght seurly dwell in at þat cite
withouten...any harme takyng. ‘He could safely live in that city without...
taking any harm.’

perhaps 同様、初期近代英語期になって、次の例に見るように、推量表現(対事モダリティ表現)としての用法を発達させた。

- (7) 1604 *Othello* II. iii. 244 Yet surely Cassio, I believe, received From him that

fled some strange indignity, Which patience could not pass.

さらにその後には、以下のような「快諾」表現（対人モダリティ表現）としての用法を發達させている（快諾は聞き手への配慮を含む一種の丁寧表現である）。

(8) a. “Can you help me carry this box?” “Why, surely.”

(*Macmillan English Dictionary* 1st Edition)

b. “May I sit here?” “Surely. (= Yes, Certainly)”

(*Cambridge Advanced Learner’s Dictionary* 3rd Edition)

対事モダリティは「話し手の主観的な心的態度」と定義され、対人モダリティは「聞き手への働きかけである發話行為の發話の力や聞き手への配慮」と定義されるところから、命題表現から対事モダリティ表現への変化が「主観化」であり、対事モダリティ表現から対人モダリティ表現への変化が「相互主観化」であるのは、当然のことと言えるであろう。この対応は、上で見た *may, perhaps, surely* の命題表現から対事モダリティ表現へ、さらに対事モダリティ表現への用法の拡大は、いずれも、主観的意味、および相互主観的意味の獲得であることから明らかである。